

米国スタンフォード大学発信の終戦70周年談話¹

——談話の多様性についてのキーワードからの考察——

福本明子

I. はじめに

2015年5月、米国スタンフォード大学の8人の研究者が「もし自分が日本の首相だったら」として、終戦70周年の談話(statement)を発表した。第二次世界大戦・太平洋戦争終結(1945年)から70年という節目の年に、また、日韓の国交を樹立した日韓基本条約の締結(1965年)から50年という節目の年に、内閣総理大臣・安倍晋三(以降、安倍首相)が談話を発表することに先立っての出来事であった。これら8人の研究者の専門分野は経済、政治、外交・安全保障、歴史など多岐にわたっていた(岡崎, 2015)。この談話はスタンフォード大学から英語版と日本語版とで発表され²、その文面が東洋経済デジタルにそのまま掲載された(東洋経済デジタル, 2015)。発起人の1人の星岳雄が経済学者であること、その談話が発表の翌日(2015年5月16日)に経済雑誌である東洋経済のデジタル版に全文が掲載されたことから考えても、安倍内閣の外交政策が日本の経済活動に及ぼす影響の大きさと関心の高さが示唆されている。

安倍首相が発表するであろう「安倍談話」が注目を集めた要素や理由はいくつか考えられる。上記節目の年という要素に加え、安倍首相がどのような言葉で歴史認識を表明するかも注目の理由であった。先の50周年(1995年)には当時の内閣総理大臣の村山富一が、60周年(2005年)には小泉純一郎が談話を発表し、「村山談話」「小泉談話」とそれぞれの談話に名称がついている³。これらの談話のキーワードは、「植民地支配」「侵略」「痛切な反省」「お詫び」であり、「安倍談話」ではこれらキーワードが引き継がれるのかどうか、歴史認識がどのように表明されるのかに関心が集まっていた(NHK NEWS WEB, 2015)。また、今後の世界平和に対して、日本の貢献をどのように表明するのかにも関心が高かった(星・スナイダー, 2015)。これほどまで安倍談話への関心が高まった要因として、安倍首相のこれまでの言動や政治活動が起因することは否めない。

安倍首相のこれまでの言動や歴史認識については、国際関係、特に中国と韓国との関係を見ると、不安要素が多々あった。内閣総理大臣の2度の任期中に、日本国憲法の改正への意欲、閣議決定のみで集団的自衛権を行使できるとの解釈変更、靖国参拝などがあった。また、2014年の衆議院選挙直後から新談話の発表に意欲を表明していた安倍首相に注目が集まっていた(木村, 2015)。先述のスタンフォード大学の研究者8人らが談話を発表したのも、これら不安要素に先手を打ったともいえる。

結果的には、発表された安倍談話の評価は、様々な批判はあるものの、全体として村山談話

を踏襲しており、先の大戦についても修正主義的なあからさまな談話ではなく、「……歴代内閣の立場は、今後も、揺るぎないものであります。」(内閣総理大臣談話, 2015) との表現もあり、とりあえず、予想されていた最悪の内容・方向性ではなかった。安倍首相の談話の分析については、本稿とは別の機会に譲ることとしたい。

ここで、疑問が出るのであるが、どのような談話であれば、評価されたのであろうか。談話に対する分析や批評は多々あるものの、代替的に談話そのものを書き発表した例は先述のスタンフォード大学の研究者ら以外、見当たらない。安倍首相の談話が発表される前には、村山談話と小泉談話が引き合いに出されていたが、談話の含むべきキーワードや「型」(構成や展開)のようなものはあるのだろうか。その表現には、許容の幅ともいべき多様性はどれほどあるのだろうか。

本稿は、そもそも「談話」とは何を指し、その機能などを踏まえうえて、村山談話のキーワードの観点にしぼって談話の表現の多様性を考えてみたい。よって、立場が内閣総理大臣ではなく、専門が多様な研究者が執筆した談話、即ち、スタンフォード大学の研究者発表の談話を分析することで考えてみる。よって、本稿の研究課題は、「スタンフォード大学の研究者8人が発表した談話は村山談話のキーワードを踏襲しているのか」である。

II. 「談話」とは

上記研究課題への解答を得るために、まず、「談話」を定義し、その機能や周囲が期待する役割について概観する。具体的には、「談話」の定義、「談話」の役割と影響、談話の国際間の評価、について順に見ていく。

II-1. 「談話」の定義

「談話」とは、そもそもどのようなものを指すのであろうか。また、その意味は、本稿の対象である内閣総理大臣が発表する談話との関連性はどのような点にあるのであろうか。日本国語大辞典(第2版)によると「(1) はなしをすること。はなし。会話。だんかい。(2) 非公式な、または形式ばらないでする、ある事柄についての意見。また、その発表。」とある。数名でざっくばらんに話しをする場所を「談話室」とよぶように、(1)は気楽な話し合いを指し、そのような使用例であれば、797年頃の『三教指帰』まで文献をさかのぼることができる(日本国語大辞典)⁴。(2)の、ある事柄についての見解や発表と意味が変化すると、1937~38年の久生十蘭の『魔都』まで時間が経過する⁵。政治的なニュアンスを帯びるようになったのは、20世紀に入ってからといえる。後者の方が、本稿の対象とする談話に近い。しかし、更に調べると、見解や発表もかなりフォーマルな手続きを経るものであることもわかる。

本稿の対象である内閣総理大臣が発表する談話は、閣議決定の手続きを踏むかどうかで、名称が異なる。NHK NEWS WEB(2015)によると、閣議決定を経て発表されたものを「総理大

臣談話」と表記し、経なかったものを「総理大臣の談話」と「の」を一文字いれて表記を変え、日本政府の公式見解かどうか区別をするという。前者は日本政府の公式見解となり、内閣が変わっても、内容は原則として引き継がれることとなるが、後者は、総理大臣個人の政治的信条や見解を表現したものとなるという。この観点からすると、戦後50年の村山談話、戦後60年の小泉談話、そして、今回の戦後70年の安倍談話は、閣議決定を経ているので、日本政府の公式見解という位置づけとなる。

更に、「談話」の機会は、戦後何十周年という節目だけにとどまらない。前首相の菅直人は、平成22(2010)年8月10日に日韓併合条約の機会に「総理大臣談話」を発表している（首相官邸, 2010）。また、「談話」の発表者は総理大臣に限られていない。首相官邸のホームページでキーワードを「談話」と入力し、検索をかけると3921件ヒットした（2015年11月7日時点）。ヒットした事例をみていくと、総理大臣に加え、官房長官や大臣も発表している記録が残っている。要は、政府の要職に就く人物が、節目や大きなイベントに際し発表する声明や供述が「談話」であることが分かる。

では、内閣総理大臣が発表する談話には特にどのような役割と影響があるのであろうか。

II-2. 「談話」の役割と影響

閣議決定を経て、日本の首長が発表する談話は、日本の国際関係の指針を周辺国や関係諸国に知らしめ、国際関係に大いに影響を与える。談話のその役割と影響の大きさは、研究者も「日本の将来の方向性を占う重要な指標」（星・スナイダー, 2015, p.1）の一つと指摘している。また、星・スナイダー（2015）は、北東アジアの近隣諸国やアメリカと日本との関係に大いに影響を及ぼすことも付言している。それほど大きな影響力は、70周年の談話発表の前に有識者会議が設けられ、平成27年2月以降に7回にわたり会議が開かれ論点が検討されてきた（朝日デジタル, 2015年8月7日）点からも見て取ることができる。また、安倍談話発表前後に中国や韓国から、談話の内容や方向性に関して提言やコメントが発表されている。8月6日に東南アジア諸国連合（ASEAN）関連外相会議が開かれたクアラルンプールで、中国の王毅（ワンイー）外相首相と韓国の尹炳世（ユンビョンセ）外相が、岸田文雄外相との会談にて、それぞれが、談話の内容について歴代内閣の歴史認識を継承するよう要望が表明されていた（朝日新聞デジタル, 2015年8月6日）。発表前から、安倍談話は外交上影響があったのだ。

また、談話の発表後も、専門家らの言及や検証は多い。インターネットでキーワード「安倍談話」「検証」で検索をかけると、438,000件ヒットする（2015年11月8日時点）。同じ書籍や、サイト、記事が複数回ヒットしたとしても、万単位で言及や検証がみられる。日本の内閣総理大臣が閣議決定を経て発表する談話の国際関係における重要な役割と、周囲への影響の大きさを見ることができる。

ただ、「戦後の談話」というものの自体が難しい存在である。日本についての否定的な記憶を想起する機会にもなっているからだ。日本にとっては、帝国・植民地主義の転換となり、その後

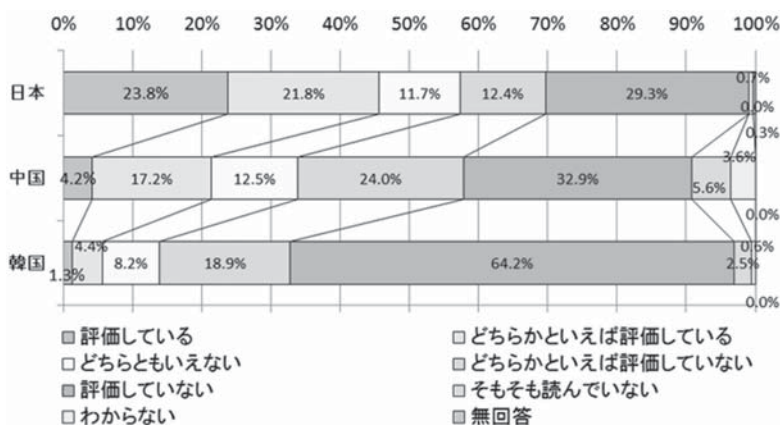
の経済復興・発展が続き、廃土から生まれ変わったイメージがあるものの、中国・韓国・米国にとってはそうではない。木村（2015）によると、第二次世界大戦・太平洋戦争やそれにまつわる歴史認識が活性化すればするほど、談話には、「国際社会において過去の日本が持つマイナスのイメージを思い起こさせる効果」があるという。負の想起を伴う内容を談話でどのように昇華させるのか、その工夫についての探究は重要である。過去の行為を踏まえ、戦後の復興や今後の責任や貢献を語る談話に付きまとう難しさは、時数の短さに加え、ここにもあるのだ。

II-3. 「談話」の国際間の評価

更に、国により受け止め方はどれほど幅があるのだろうか。特定非営利活動法人・言論NPOが公表した日中韓3カ国の有識者800名の回答結果を一部抜粋して見てみる。図1は、安倍談話の評価全般についてであり、図2（次ページ）は談話が日中・日韓関係の改善に役立つ内容であったかどうか、についての回答である。図1では、「評価している」「どちらかといえば評価している」の合計が、日本（44.6%）・中国（21.4%）・韓国（5.7%）と、日本と中国の間で約2倍強、日本と韓国の間で約8倍弱の開きがあり、日本の有識者に比べて、中国と韓国の有識者の評価が厳しいことがわかる。図2では、日中・日韓それぞれの関係の改善に役立つかどうかについて厳しい評価が多く、中国よりも韓国がより厳しい評価となっている。ただ、「関係改善に役立つ内容になった」「どちらかといえば関係改善に役立つ内容になった」を合算すると、中国の有識者は3割近くが、とりあえず評価していることもわかる。同じ談話でも国や立場が違えば評価が異なるのである。

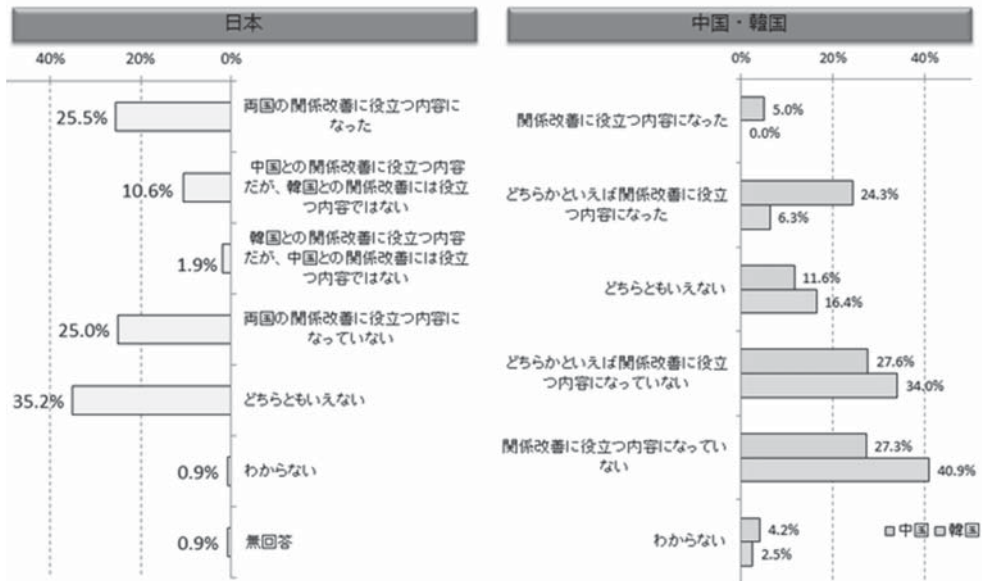
以上の中国と韓国の評価の違いはどこから来るのだろうか。外交・経済関係など様々な原因はあるであろうが、李（2015, p. 13）によると、安倍談話で日露戦争の日本の勝利に関する「多

図1 「安倍談話」をどう評価するのか



（言論NPO, 2015）

図2 「安倍談話」のが日中、日韓関係の改善に役立つ内容かどうか



（言論 NPO, 2015）

くのアジアやアフリカの人々を勇気づけました」という表現が、韓国内では正反対の「悲劇の始まり」という認識が常識であり、その個所への違和感一番大きかったと述べている。その他にも評価に影響を与えた要因の分析は後日に譲るとして、言語 NPO（2015）の調査結果は、日本の視点を超えた歴史認識を談話に反映することの重要性を示唆している。

ただし、談話についての評価は、その表現や内容以外の政治的な要素も関係がある。木村（2005）によると、2010年に当時の内閣総理大臣・菅直人による日韓併合条約100周年の談話は、当時の韓国の李明博大統領が、北朝鮮との祖国統一問題を中心に置きたいとの観点から、日韓関係についての言及が最小限となり、菅談話を争点化しないという判断を行ったという。それゆえ、5年前に発表された談話にもかかわらず、紛糾せず、人々の記録に残りにくかったと分析している。即ち、談話の内容や表現だけでない政治的に多くの要素が批判の有無やそのトーンを左右するといえる。

その他の要素があることも踏まえつつ、それでも、談話が争点になり、その内容と表現は検証されている。どのような談話であれば、その国の認識を超え普遍的な談話となり得るのだろうか。政治が経済・社会・外交上の問題と絡み複雑で、談話ひとつで劇的に関係が改善できるものでもないだろうが、より良い国際関係を築く可能性のある談話とはどのような内容や構成であろうか。本稿では、安倍談話に先立って発表された米国スタンフォード大学の研究者8人の談話の「村山談話」のキーワードに沿って分析し、研究課題として談話のあり方の多様性を検証する。

Ⅲ. 研究方法

ここでは、本稿の研究課題を探求するための「分析の対象」「分析の枠組みとユニット」について順次、説明をする。

Ⅲ-1. 分析の対象（テキスト）

冒頭で紹介したスタンフォード大学研究者8人の執筆した談話「太平洋戦争終結70周年に考える～8人のスタンフォード研究者による終戦の日の談話」を分析の対象とする。その8人の名前・所属・専門分野は表1の通りである。政治学、経済学、歴史学、国際関係など多分野の専門家が含まれる。

冊子のまえがき（星・スナイダー，2015）を基に、依頼条件などについて説明する。発起人を含むこれら8人は、星とスナイダーの呼び掛け「もし自分が日本の首相だったら70周年の談話としてどのようなものを発表するのか？」に応じて、原稿が提出された。星とスナイダー

表1 談話の執筆者⁵

名前	スタンフォード大学内での所属	専門分野
Alberto Diaz-Cayeros (アルベルト・ディアス・カイエロス)	フリーマン・スポグリ国際研究所シニアフェロー、政治学部教授	統治、地方開発
Peter Duus (ピーター・ドウス)	日本歴史学名誉教授、フーバー研究所シニアフェロー	日本帝国史、日本近代史
Thomas Fingar (トーマス・フィンガー)	フリーマン・スポグリ国際研究所特別研究員	米国・東アジア関係、中国外交、米国の安産保障
David Holloway (デヴィット・ホロウェイ)	歴史学部・政治学部教授。 フリーマン・スポグリ国際研究所シニアフェロー	核政策をめぐる国際政治史、ソ連の安全保障対策
星 岳雄 (ホシ・タケオ)	ショレンスタイン・アジア太平洋研究所日本プログラム・ディレクター、ビジネススクール教授、フリーマン・スポグリ国際研究所シニアフェロー	金融論、マクロ経済学、日本経済論
李容碩 (イ・ヨンサク)	フリーマン・スポグリ国際研究所フェロー、ショレンスタイン・アジア太平洋研究所、韓国プログラム一員	国内政策、国際関係による経済発展・経済成長
Henry Rowen (ヘンリー・ローウェン)	フーバー研究所シニアフェロー、フリーマン・スポグリ国際研究所シニアフェロー	米国・アジアの国際安全保障・経済発展
Daniel Sneider (ダニエル・スナイダー)	ショレンスタイン・アジア太平洋研究所副所長	米国の安全保障政策、日本と韓国の外交政策、アジアの先端技術進歩

(星・スナイダー (2015) を基に筆者作成)

（2015, p. 1）は、その呼び掛けの意図として、安倍談話に影響を与えるということではなく、「残虐非道な戦争に対する日本の責任の取り方に関する、また世界的な平和と繁栄を築くための日本の役割に関する合理的・客観的な考え方についての多様性を理解すること」だという。その原稿の言語は、すべて英語執筆され、日本語と英語の両方で出版するために翻訳会社を通じて日本語に翻訳され、星が表現に手を加えて、読みやすくしたとある。また、原稿を依頼した時の条件は、1）安倍首相にとって最も重要な目的の1つだと考えられるので、日本が東アジアおよび世界においてより強いリーダーシップを発揮することへの支持固めになるような内容であること、2）戦後70周年に発表される談話なので、第二次世界大戦・太平洋戦争の意味について言及すること、3）過去の「村山談話」「小泉談話」と同程度の長さにしたいため、700語を超えてはいけないこと、の3つであった。

以上の詳細は、談話を分析するうえで重要と思われるので、ここに記載しておく。また、提出原稿が英語で書かれていたことも踏まえ、本稿では英語の談話を中心に分析し、日本語は参照することとしたい。

III-2. 分析の枠組みとユニット

本稿では安倍談話を村山談話のキーワードが継承されているかについて調査する。総理大臣談話の発表後に検証されるのは、先の談話を継承しているかどうかであり、その判断の一つとして3つのキーワード「植民地支配と侵略」(colonial rule and aggression)、「痛切な反省」(deep remorse)、「心からのお詫び」(my heartfelt apology)を含んでいるかどうかである（参考：丸木・土佐，2015年8月15日、千田，2015）。よってこれら3つの語句が使用されているかどうかを確認をし、一覧表を作成した（次ページ、表2-1, 2-2）。また、類似する言葉が使用されたときは報告した。この分析の、分析の単位は「句」である。

そのほかには、過去の日本の行為をどのように捉えているのかを確認するためと、登場の頻度が高かったこともあり「間違い」「誤り」「失敗」「苦しみ」を指す語句も拾った。

IV. 結果と考察

談話の分析結果を報告した後、研究課題「スタンフォード大学の研究者8人が発表した談話の表現は村山談話のキーワードを踏襲しているのか」への考察を行う。

IV-1. 結果

「村山談話」3つのキーワードの有無について調査した結果を報告する。表2-1と表2-2（次ページ）は、各談話のキーワードの使用について調べ、まとめたものである。丸印（○）は、村山談話のキーワードをそのまま用いていた場合に使用した。三角印（△）は、キーワードそ

表2-1 村山談話のキーワードの有無

キーワード	カイエロス	ドウス	フィンガー	ホロウエイ
植民地支配・侵略 colonial rule and aggression	○	△ a reckless war of aggression, territorial expansion, war of aggression	×	○
痛切な反省 deep remorse	×	○ contrition, our grief	×	○ grieve, profound mourning
お詫びmy heartfelt apology	△ our deepest apologies	×	×	○
その他： 間違い、失敗 mistakes, failure	×	miscalculated plans, misguided dreams, mistaken policies, grave errors, misguided	past mistakes	mistaken national policy
その他：他国の 人々の苦しみ sufferings	enormous sufferings, suffered	suffering (2回), victims (2回)	×	suffering

表2-2 村山談話のキーワードの有無

キーワード	星	李	ローウェン	スナイダー
植民地支配・侵略 colonial rule and aggression	○	△ colonial rule	△ an aggressive colonial power, militarism, our earlier aggression	○ colonial rule, colonial rule, imperialist expansion, aggressive war
痛切な反省 deep remorse	○ mourn	△ deep sorrow and regret	×	○
お詫び my heartfelt apology	○	△ my sincere apologies, ask forgiveness	×	○
その他：間違い、 失敗 mistakes, failureなど	the failure, past crime, past failure	stupidity	regrettable consequence, our faults	mistaken decisions
その他：他国の 人々の苦しみ sufferings など	sufferings	sufferings, crippled the lives, suffering, suffer, suffered indignity, afflicted	great harm on other peoples	suffered (2回), suffering

のままの表現ではないが、類似する語句で表現した場合とし、その語句を併記した。バツ印(×)は、キーワードの使用がない場合である。

また、各談話を読み進めるに当たり、頻度の高い語句も記録を取った。特に、日本の戦中の政策の間違いや失敗を表現する語句(例:mistaken, failure)、アジア諸国の人々の苦しみを表現する語句(例:suffer)が頻出したので、それらの記録を取り、二重線で区切り欄の下方で報告した。

分析の結果は、村山談話の3つのキーワード全てをそのまま使用したのは、8名中3名であった。そのキーワードと類似する表現まで入れても8名中4名であった。それぞれのキーワード

ほどの程度使用されたのか、使用されなかった談話ではどのような意図がこめられていたのか、考察を行う。

IV-2. 考察

村山談話のキーワード「植民地支配と侵略」(colonial rule and aggression)、「痛切な反省」(deep remorse)、「心からのお詫び」(my heartfelt apology) いずれかを使用しなかった研究者の談話を中心に解釈をし、考察を行う。

IV-2-A. 「植民地支配と侵略」

「植民地支配と侵略」(colonial rule and aggression) については、1名を除き、7名の談話作者が村山談話のキーワードをそのままか、又は類似する語句を使用していた。また、その7名のうち6名が、戦中の日本の行為や政策が「誤り」(failure, mistake, mistaken, error等)であったと認める語句を使用していた。

植民地支配とアジア諸国の人々の苦しみの両方に言及のなかったフィンガーの談話(p.5)を見てみる。村山談話のキーワードこそは使用されていないが、別の表現で先の戦争の惨禍については表現されている。「国家利益」"national interests"を追求した戦争に対して、「破壊と人道的悲劇に対して、重大な責任」"a heavy responsibility for the destruction and human tragedy"があることは明確であると表現している。ただし、村山談話のキーワードを意図的に使用していないことを読み取ることができる表現がある。「今とは異なる政治状況を背景に」"in the very different political context of their historical era"戦争が起こり、当時は紛争解決に武力が用いられていた時代であると表現している。今の政治状況は昔の状況とは異なると、現在と過去を切り離す姿勢を見て取ることができる。ただし、「過去は変えられませんが、決して忘れてはなりません」"We cannot change and must never forget the past."との表現もある。しかし、それは「歴史から学び、よりよい未来を実現すること」"our focus should be on learning from history to ensure a better future."であり、現在の謝罪のためではないとの意図が暗示されている。よって、フィンガーは次のキーワードでもある「痛切な反省」も「お詫び」も自身の談話には含んでいない。異なる時代に起こった出来事であり、国家の過去の既に裁かれた行為に対して、個人が反省や謝罪をするものではないとの考えが暗示されている。むしろその後教訓を学びどのように行動に反映させてきたのかという現在までの国の実績と今後の貢献を重視していることも表現されている("Japanese consider it more appropriate to judge us on the basis of our actions during the past seventy years and what we hope to do in future.")。

即ち、植民地支配とその評価については、8名とも共通の認識がある。過去の日本の行為は植民地支配にあたり、人道的に否であるのだ。ただし、その認識がどのように現在の行動に反映されるべきかは、意見が分かれる。

IV-2-B. 「痛切な反省」と「お詫び」

次に、村山談話の2つのキーワード、「痛切な反省」(deep remorse)と「お詫び」(my heartfelt apology)の使用についてここで報告する。両方の語句、又は類似する表現を使用していた談話作者が8名中4名おり、キーワードと関連した用語、特にアジア諸国の人々の苦しみ(suffering, suffered等)の表現と同時に使用していた。苦しんだのは個々の人々であり、それに対して反省やお詫びが人として必要と考え表現されている。自分の行為ではないが、所属する集団の人々が過去に行った行為に対して謝罪するという謝罪対象の広さを文化的視点から考えると、談話作者は文化的にまたは政治的にアジア諸国の文化事情を配慮しているといえる。

反省とお詫びの両方、またはどちらか1つしか使用していない談話を見ていく。フィンガーについては既に述べたので、それ以外のカイエロス、ドウス、ローウェンの順で談話をみていく。カイエロス(p.3)は、お詫びを村山談話とは別の言葉で表現しているが、反省については表現していない。談話の中心は日本の「繁栄や平和を生かし、貢献」“leverage our prosperity and peace”であるため、むしろ戦後70年間に日本が海外からの支援をうけ発展してきた繁栄を、今度はより恵まれない国々にお返しをし“It is our turn to help our neighbors...”、世界に貢献するというリーダーシップをとるべきだという。内容は異なるものの、先述のフィンガーと同様、過去から学びを生かして成しとげた現在の達成を、隣国と世界の未来に生かすという展開になっている。その「貢献」が中心的なテーマであり、過去を振り返る反省や悔恨は表現されず、謝罪も発話するものの、表現の分量は多くない。

次に、ドウスの談話を検証する。ドウス(p.4)は明確にお詫びこそ表現してはいないが、その他のキーワードや関連用語の全てにおいて、複数回繰り返して表現している。その談話にはむしろ、お詫びの言葉そのものを使用しなくとも、お詫びの意を表現する手法を示し、「いつまで詫び続けなければならないのか」という批判をかわし、過去の戦争責任について言及しようとする代替案に見える。被害国や被害者には、談話の1~3段落目までを使い、“deep remorse,” “contrition,” “our grief”を用いて反省の意を表現している。過去の戦争が間違いなく侵略戦争であったことを“a reckless war of aggression,” “territorial expansion,” “war of aggression”と繰り返し表現し、その評価は“miscalculated plans,” “misguided dreams,” “mistaken policies,” “grave errors,” “misguided”と批判の言葉を重ねる。その結果、被害者“victims”が苦しむこととなった“suffering”とそれぞれの言葉が2回ずつ用いられている。過去の日本の行為が原因であり、その惨禍が結果であること、それについて深く反省を表現することにより、謝罪を戦略的に省略したといえる。

最後に、ローウェンの談話を検証する。ローウェン(p.9)は反省とお詫びの表現がない。日本の過去の行為が“an aggressive colonial power”であり、後悔する結果“regrettable consequences”を招き、その結果、多大な被害を周辺国の人々にもたらした“great harm on other peoples”と、表現されている。しかし、それらは過去に起こったことであり“in the now distant past”、今や日本は模範的な世界市民“an exemplary world citizen”であると述べている。戦後に日本がどれだけ世界経済や平和に貢献してきたのかを述べた後に、謝罪を要求し続

ける他国の方が、謝罪する必要があるのではないか“might they have done some things for which to apologize”と切り返している。過去を現在・未来のための教訓と捉え、個人がどこまで過去の国の行為に謝罪すべきかという点については、ローウェンは先述のフィンガー（IV-2-A）と類似し、現代の個人が謝罪する必要がないという姿勢が示唆されている。

IV-3. 研究課題への回答

以上が、「村山談話」の3つのキーワードと頻出語句に基づく分析である。研究課題である表現の多様性については、2つのことが言える。

まず1つ目は、キーワードの踏襲は、必ずしも必要ではないということである。日本で総理大臣談話を検証する際、メディアでは基準の一つではあるが、ドウスのように（表2-1、IV-2-B）村山談話のキーワードを踏襲せずとも、植民地支配の否を唱え、その結果被害を受けた諸国、人々の苦しみを表現することができる。村山談話のキーワードに該当する単語の使用や繰り返しのより、踏襲の意図は伝えることができるといえる。むしろ、キーワードを使用している、その他のキーワードや関連用語がないと、「取りあえず踏襲した」というポーズであり物足りない印象を与える。

2つ目は、過去の日本の行為が、植民地支配であり、侵略行為であり、どのように転んでも否の評価でしかないという点である。村山談話のキーワードを踏襲しなくても、類似の表現で表明することはできる。スタンフォードの8名の研究者の専門分野は、先述の通り、多岐にわたる。この8名全員が言及しているということは、どの専門分野のからみても、談話としては落としてはならない観点であることが示唆されている。その観点はどのようにでも他の主張の表現の工夫をして、矛盾と受け取られるようになってはいけぬ。この点において、安倍談話ではその矛盾が垣間見える表現がある。

あの戦争には何ら関わりのない、私たちの子や孫、そしてその先の世代の子どもたちに、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません。

歴史を継承していくのかどうなのか逆説的に取れる表現もある。このような懸念も、フィンガー（p. 5）の次のような表現なら、より積極的で未来志向で、且つ、安倍首相の上記持論も入れ込むことができる。

In this year of remembrance, let us resolve together to ensure that no future generation will experience the destruction, pain, and reconciliation challenges that have caused so much anguish during my lifetime.

（強調、本稿筆者による）

キーワード分析を通じて見えたのは以上の2点であった。

V. おわりに

戦後談話の出る時期に、メディアで分析が飛び交うのを見て、「侵略」なのか「進出」なのか、「自衛隊」なのか「軍隊」なのか、など認識の部分にかかわるとはいえ、分析や批評の細かさになかなか関心を持たずにいた。談話の内容といえば、戦前・戦中の日本の植民地支配と侵略、戦後から現在までの復興と経済発展、未来へ向けての提言、というお決まりの内容があり、表現の多様性の余地があるとは意識していなかった。しかし、今回、米国の研究者が、安倍談話に先立ち、自分たちの談話を発表し、関心をもった。専門分野や文化的背景の異なる人々は、何を落としてはならず、どのような表現で談話を書いたのだらうと気になった。本稿では、ただ村山談話のキーワードを踏襲するか、しないのか、という観点から調べただけでも、その研究者らの工夫の数々、また哲学や考え方が明確に提示されていた。キーワードにこだわらず、植民地支配の否を表現としておとしはけないことが、今後、談話をみるときのポイントであると学ぶことができた。

本稿はキーワードのみで分析したものであり、しかも限られた数のキーワードであり、結論には限りがあることは承知している。その認識を踏まえ、今後さらに段落構成や展開の分析も加えて、談話を読む視点を培っていきたい。そして、談話が首相だけが出すのではなく、多くの人が自由に日本の過去・現在・未来について、関係諸国とどのような世界を築いていきたいのか、語り、振り返る手段の一つとなることを願う。

注

- 1 本研究はJSPS 科研費 25370724 の助成を受けたものです。
- 2 星・スナイダー (2015) によると、呼び掛けに応じて提出された原稿はすべて英語であった。日本語への翻訳は、外部の会社に発注され、星が手を加えて読みやすく修正したという。日本語版は、夏ごろには英語版と共に公開されていたが、2015年11月5日の時点では閲覧が不可能であったが、代わりに、東洋経済オンライン (2015年5月16日) に日本語と英語の両方の版が掲載されているので参照されたし。
- 3 小学館のデジタル大辞泉 (第二版) には「村山談話」の見出しがある。
- 4 日本国語大辞典に掲載の事例は、三教指帰 [797 頃] 上より「三献已訖、促膝談話」とある。
- 5 日本国語大辞典に掲載の事例は、魔都 [1937~38] 〈久生十蘭〉三〇から「よし、ひとつこの古地図をたよりに台座の下までたどりつき、王様を掴へて談話を取ってやらねばならん」とある。
- 6 執筆者名のカタカナの表記、所属、専門分野については、日本語版の表記に基づく。名前の記載の順序は、英語版・日本語版に談話が掲載された通りである。所属については、全員がスタンフォード大学またはその関連施設に所属している。

引用・参考文献

- 朝日新聞デジタル（2015年8月7日）『安倍談話、有識者懇の報告書全文・はじめに』（<http://www.asahi.com/articles/ASH8662ZGH86UTFK00W.html> 2015年11月8日閲覧）
- 朝日新聞デジタル（2015年8月6日）『中韓外相、安倍談話をけん制 歴史認識の継続求める』（<http://www.asahi.com/articles/ASH86619RH86UTFK00V.html?iref=reca> 2015年11月8日閲覧）
- アルベルト・ディアス-カイエロス、ピーター・ドウス、トーマス・フィンガー、デビッド・ホロウェイ、星岳雄、イ・ヨンサク、ヘンリー・ローウェン、ダニエル・スナイダー（2015）「太平洋戦争終結 70 周年に考える— 8 人のスタンフォード研究者による終戦の日の談話」。日本語版：閲覧不可（2015年11月5日時点）。Díaz-Cayeros, A., Duus, P., Fingar, T., Holloway, D., Hoshi, T., Lee Y. S., Rowen, H. S., Sneider, D. C. (2015) *Reflections on the Seventieth Anniversary of the End of the Pacific War: Eight Stanford Scholars Write Their Own August Statement*. (English version: http://aparc.fsi.stanford.edu/sites/default/files/reflections_on_the_end_of_the_pacific_war_reduced_0.pdf 2015年11月5日閲覧）
- 李元徳（2015年10月10日）「日露戦争『悲劇の始まり』」朝日新聞 朝刊 p. 13
- 伊藤典子（1996）「8月15日の『首相談話』に対する日本・欧米の新聞の反応」時事英語学研究 35 63-81.
- 木村幹（2015年3月8日）「政府発表『談話』とは何か」The Huffington Post (http://www.huffingtonpost.jp/kan-kimura/government-discourse_b_6426768.html 2015年11月3日閲覧）
- NHK NEWS WEB（2015）「キーワードでわかる戦後 70 年談話」<http://www3.nhk.or.jp/news/sengo70/index.html>（2015年11月5日閲覧）
- 岡崎哲二（2015年5月20日）「（読み解き経済）戦後 70 年談話 経済紙を研究する岡崎哲二さん」朝日新聞デジタル <http://www.asahi.com/articles/DA3S11762839.html>（2015年10月7日閲覧）
- 首相官邸（2015）『内閣総理大臣談話』平成 27 年 8 月 14 日 内閣総理大臣談話 (http://www.kantei.go.jp/jp/97_abe/discourse/20150814danwa.html 2015年11月7日閲覧）
- 首相官邸（2010）『内閣総理大臣談話』管総理の演説・記者会見等 (<http://www.kantei.go.jp/jp/kan/statement/201008/10danwa.html> 2015年11月7日閲覧）
- 東洋経済オンライン 編集部（2015年11月5日）「米国の学者 8 人、『私なら 70 年談話をこう語る』アジアの平和のために何を語るべきか」東洋経済オンライン。日本語版：<http://toyokeizai.net/articles/-/69608>（2015年11月5日閲覧）。What Do You Say on the 70th Anniversary? 英語版：<http://toyokeizai.net/articles/-/69706>（2015年11月5日閲覧）。
- 日本国語大辞典。JapanKnowledge より。（<http://japanknowledge.com> 2015年11月06日閲覧）
- 星岳雄、ダニエル・スナイダー（2015）「太平洋戦争終結 70 周年に考える— 8 人のスタンフォード研究者による終戦の日の談話」。東洋経済オンライン。日本語版：<http://toyokeizai.net/articles/-/69608>（2015年11月5日閲覧）